

白藍塾オリジナル

2020入試小論文分析&解答のヒント

2020年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 慶応・文学部

要約問題（300～360字）＋小論文問題（320～400字）という出題形式や、設問の書き方まで、ここ数年と同じ。課題文は、それほど難しい内容ではない。まとめると、次のようになる。

「従来、先進国は移民を受け入れるにあたって多文化主義を政策原理としてきたが、それはあくまで移民が移住先の国の文化に統合されることを前提としていた。ところが、9・11をきっかけとして、多文化主義は批判の対象となり、社会規範としての力を失った。とはいえ、アフリカやアジアでは、現在でも、統合を求めない、互いに距離を置いた状態での多文化共存が成立している。そのように、多様な人間が互いの違いを認め合いつつ自由に出入りできるような社会は、非西洋世界の組織原理であると同時に、リベラリズムの理想とする社会でもあるはずだ。そのように、多様な人々が自生的な秩序を形成していくような社会は、すでに世界のあちこちで定着しつつある。今後、情報化が進むにつれて、世界はさらにそうした分散型のネットワーク社会へと移行していくだろう」

設問Ⅰは、以上のような内容を字数に合わせてまとめるとよいだろう。

設問Ⅱは、「集団に属する」ということについての自分の考えを述べるのが求められている。

課題文ではそもそも「集団」という言葉がほとんど使われていないので、少しとまどう人もいるかもしれない。だが、筆者が西洋と非西洋を対比させながら論じているのは、「統合」を原理とする中央集権的な集団と、「共存」を原理とする分散型のネットワーク的な集団のあり方（集団と個人の関係）との違いなので、それを踏まえて考える必要がある。逆に、その点さえ踏まえていれば、国などの大きな集団でなくても、身近な集団を例に論じてもよいだろう。筆者は、後者のような集団のあり方を肯定的に捉えているが、その考えが正しいかどうかを問題提起するのが正攻法だ。

イエスで答えつつ、そうした集団のあり方こそが情報化やグローバル化の進んだ現代社会における個人の生き方にふさわしいことを論じるのが、最も書きやすいパターンだろう。もちろん、ノーの立場で、「そうした集団のあり方だと、個人が帰属意識を持たず、アイデンティティーが失われてしまう」といった方向で書くことも可能。うまく書ければ、それでも十分説得力のある内容になるはずだ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://www.hakuranjuku.co.jp>